

# 話型から見る韓国と日本の神話

## － 女の籠もりと男の離郷－

関丙勳\*

---

### 目 次

---

1. はじめに
  2. 桓雄の離天と、熊の穴籠もり
  3. 柳花の幽閉と、朱蒙の流離
  4. 籠もるイザナミとアマテラス
  5. 流離うすサノヲとオオナムチ
  6. おわりに
- 

## 1. はじめに

昨年(2007)の春、高句麗の建国過程を描いたドラマ<朱蒙>が、召西奴が息子の沸流・温祚とともに高句麗を離れ、南下する場面を最後に長い旅程に終止符を打った。民族の歴史を教え諭し、国家の主体性鼓吹に貢献したという賛辞とともに、一握りの当時の資料を歪曲したということで学界から強い叱咤もあった。筆者は『三国史記』の「高句麗本紀」や「百濟本紀」、また「広開土好太王碑文」などとの対照を通して、ドラマに表われた脚色のほどをある程度推し量ることができた。しかしなにより、資料の冒頭を彩っている神話的要素をどのように解釈し、現実感を持たせて描いていだろうか、という点が関心事であった。また、ドラマがきっかけとなり、日本の神代神話との対比を通じて幾らか類似性を見出すことができた。だが、ここで述べる類似性とは単なる話型上の類似であり、内容における影響関係などの根元的なことを論ずるものではない。神話の系統について研究するならば、中国や北方・南方系の民族の神話を統括的に取り上げ、尚且つ細密な比較を通して共通点や差異点などを纏めなければならない。ということで、それらに関する研

---

\* 大田大 日語日文學科 助教授 日本古典文學専攻

究は順次に従って行くことにし、今回は物語文学の典型的な話型の源泉となったと思われる二つの要素を神話のなかから探ってみたいと思うのである。

筆者は近頃、物語の典型的な話型になっている貴種流離と籠もりのパタン<sup>1)</sup>の原形を追究してきた。『伊勢物語』の「東下り」章段における男の流離や、『源氏物語』における光源氏の須磨流謫などは平安時代の貴種流離を代表する物語であり、またよく知られた話でもある。一方、女主人公の場合、『竹取物語』において、かぐや姫が竹の中から発見されたり塗籠に保護されたりする話や、『伊勢物語』六段で、蔵の中に押し入れられる女の話、また『落窪物語』で物置に監禁される落窪姫の話などからは、籠もり譚ともいえる共通点が見受けられる。

しかし、以上の平安時代の物語に現れた共通の話型は、時代を遡って『古事記』の神話のなかからも容易に見出すことができる。つまり、物語の淵源を神話から探ることができるということである。イザナキの黄泉の国からの逃走や、父神のイザナキによって追放されたり、高天原から出雲へ追放されるスサノヲの話、また、兄弟の八十神たちから迫害を受け、根の国へ逃亡するオオナムチ(後のオオクニヌシ)の話、他、兄のホデリの命の迫害によって地上を離れ海宮を訪ねるホヲリの命の話などは、貴種流離譚の話型を形取っており、これらは既に知られたものでもある。

その一方、イザナミが黄泉の殿の内に入る話や、天石屋に籠もるアマテラスの話などからは、平安時代の物語に見られる女の監禁や籠もりの原形を見出すことができるのである<sup>2)</sup>。

ところで、日本の神話における流離や籠もり譚が幾多の韓国の建国神話のなかからも確認される。『三国遺事』において、天帝釈の桓因の庶子である桓雄が離天し、地上に降りてきたり、洞穴の中に籠もることで女に生まれ変わる熊女の話や、『三国史記』の「高句麗本紀」のなかで、扶余王の金蛙に連れてこられ、室の中に幽閉される柳花の話や、嫡長子の帶素などに迫害を受け扶余を逃れる朱蒙の話などは、類型といえば類型といえなくもない。

また、その結果として、おおよそ男は流離から力を蓄えて帰ってきて迫害した嫡子などを屈服させ支配者になったり、流離先で新しい国を建国したりする話が続き、女の場合は、籠もりの末、再生したり子供を産んだりする結果を齎している。ただ、韓国の神話において男は離郷から戻ってきて迫害していた異腹の兄弟などを屈服させ支配者になることはなく、主に後者の新しい国を建てる構造が一般的である。

いずれにせよ、韓国と日本の神話のなかには男主人公の離郷と、女主人公の籠もりとが大きな特徴として構成されていることが確認できるのである。表面的には試練の様子を描いているが、実際、女性の籠もりは出産や再生を祈願する信仰の反映であり、親元を離れ

1) 関内勲(2007)「古代文学における女の「籠もり」-話型としての女の試練譚-」『日本語文学』34集、韓国日本語学会、pp.207~228

た男の流離の姿は、権力から疎外された庶子や次子以下の王子などが、自分の意思または他人の迫害によって本土を離れ、逆境を強いられる構造を帯びているが、そこには新しい王国建設のための通過儀礼のような意味が暗示されていることが多いということである。

では、桓雄の離天に纏る古朝鮮の建国神話と朱蒙誕生の神話を含め、韓国と日本の主要神話を中心に据え、神話を構成する二大話型について追究していきたい。

## 2. 桓雄の離天と、熊の穴籠もり

### ○ 桓雄の離天と、熊の穴籠もりによる壇君の誕生

古記云。昔桓因謂帝釈也庶子桓雄。数意天下。貪求人世。父知子意。下視三危太白可以弘益人間。乃授天符印三箇。遣往理之。雄率徒三千、降於太伯山頂即太伯今妙香山。神壇樹下。是之神市。是謂桓雄天王也。將風伯雨師雲師。而主穀生命主刑主善惡。凡主人間三百六十餘事。在世理化。時有一熊一虎、同穴而居。常祈于神雄。願化為人。時神遺靈一炷・蒜二十枚曰。爾輩食之。不見日光百日。便得人形。熊虎得而食之忌三七日。熊得女身。虎不能忌。而不得人身。熊女者無与為婚。故每於壇樹、呪願有孕。雄乃假化而婚之。孕生子。号曰壇君王儉。<sup>2)</sup>

韓国では、神話と言えば真っ先に古朝鮮の建国過程を記した壇君神話を想像する人が多い。上の文は、壇君が生まれるまでの記事を『三国遺事』のなかから引用したものが、天帝釈である桓因の庶子として生まれた桓雄は、天の下の人間の世を欲しがり、これを知った父帝は、天符印とともに風伯と雨師・雲師、そして三千人の部下を下賜し、地上へと送る。桓雄は白頭山または妙香山と解釈される「太伯山」の神壇樹の下に降臨し、人の世を治め、教化していく。その頃一つの洞穴の中に棲みつつ人間への転生を願う熊と虎がいることを知る。そこで桓雄は一袋の蓬と甘東のニンニクを与え、それを食べながら百日の間穴に籠もって日光を見なければ願いが叶うだろうといった。結局、21日目で虎は試練に耐えることができず洞穴の外へと逃げ出し、熊は忍耐し女へと生まれ変わることができる。そして暫らく人間に化した桓雄と結婚して子どもを生み、それが壇君王儉である。

老若男女を問わず知らない人がいないほど国内ではよく知られた話である。ところで、ここには神話の典型的な二つの要素が反映されていることがわかる。一つは、桓雄から確認される、本拠の天を離れる庶子の姿であり、もう一つは洞窟での籠もりを通じて女へと転生する熊の様子である。より具体的にいえば、神話のなかには、男の主人公が支配者になる

2) 『訳註原文三国遺事修正版』巻一、紀異巻第一、李丙燾訳註、明文堂、1992、p.27

ために必然的に親の下を離れなければならないという前提があり、女主人公の場合は、籠りや監禁による忍耐の時間を通して生産の祝福を齎す構造が用意されているということである。

ところで桓雄の話は、民族の始祖の壇君が天から降臨した天孫の子供ということで、誇り高き神話となっている。いわゆる天孫降臨神話で、韓国における降臨型の神話はこの桓雄の他にも例が確認される。詳細は欠いているが、『三国遺事』を見ると、辰韓の六村の村長である、謁平・蘇伐都利・俱礼馬、智伯虎・祇沓・虎珍が、それぞれ、瓢岩峰・兄山・伊山・花山・明活山・金剛山などに降りてきたと記されている<sup>3)</sup>。しかし『三国史記』には新羅の始祖の朴赫居世の誕生神話に天との繋がりが無く、これについて権五擘氏は、編纂者の出自や編集意図によるものとし、新羅の祭儀において神宮の祭神が天神で、神宮の建立地が始祖が誕降した所であるという説明から、朴赫居世は天神として祀られていたことを示すものとする。天下思想に成り立つ新羅の神話について披瀝しているのである<sup>3)</sup>。

このように、古代の神話が天孫の降臨を語っており始祖である王を天神として祀ったのは、国家の正統性を天に置こうとする意図として察せられるが、新羅の朴赫居世の神話のなかには村長たちの降臨の様子を描く内容は見えず、また彼らは後に出現する朴赫居世を迎える役割を果たしているだけで、物語における役割や重要度は桓雄ほど大きいとは思えない。

筆者は桓雄による天孫降臨の形態を、離天、すなわち親元を離れた貴種の物語と取れなくもないと考える。つまり、桓因の庶子であった桓雄の降臨は、結局後継者になれない男の天からの離郷と見る。もちろん、それが天孫降臨型の神話であることに変わりはなく、それを否定する論旨ではないことを断わっておく。

また、『古事記』のなかで、スサノヲの七代目の孫のオオクニヌシとその子息らによって統治されていた、葦原中国を高天原の主宰神のアマテラスが平定させ、孫のニニギの命、すなわち天孫を降臨させ国譲りをされる所は類型と言えば類型と言える。しかし、この天孫降臨に関わる記事は、後の大和政権によって脚色された可能性が言われており<sup>4)</sup>、しかも国作りが降臨後に成されるのではなく、その前にオオクニヌシなどのスサノヲ系によって既に成っていたことを語る内容は、桓雄の降臨とは異なる様相を呈している。古朝鮮の国作りは降臨した桓雄本人によってではなく息子の壇君によってなされるのである。つまり、上山春

3) 前掲2)の巻一、紀異一「新羅始祖赫居世王」の条に見えるが、彼らは各々、及梁部李氏・沙梁部鄭氏・牟梁部孫氏・本彼部崔氏・韓枝部裴氏・習比部薛氏の先祖になったとある。また、ここでの辰韓は斯盧のほうが正しいと訳注者はいう。p.35

3) 権五擘「『三国史記』の朴赫居世神話-新羅の世界観と于山国-」『日本文化学報』31輯、韓国日本文化学会、2006、pp.425~450

4) 西郷信綱は、天皇制による権力が神話の発展を妨げ、ニニギの命の降臨においても、天子即位の大嘗祭の反映であると述べる。(『日本文学の古典』岩波新書、1966、p.7)

平氏がいうように、日本の神話では国作りが天孫降臨の不可欠の前提となっているのである<sup>5)</sup>。

北韓の史家の金錫亨は歴史的な見地から、日本の天孫降臨神話の第一段は、金官駕洛国などから北九州へ移住民集団を送った光景が反映されていると解釈しており、敗戦後、江上波夫は、韓半島から北方系統の騎馬民族、すなわち高句麗系統の民族が日向に上陸して、しばらくの間そこにおり、やがて大和に行ったという新説を主張し、その論拠としてこの天降り神話をあげていることを言及している<sup>6)</sup>。最近では金和経氏などが、スサノヲの神話を中心とした出雲系統の神話は韓国の東海岸に沿って南下した文化、すなわち東扶余から新羅へ繋がる地域の神話と密接な関わりがあると推定し、これを『出雲国風土記』などの資料を取り上げて説明している<sup>7)</sup>。

他、天孫降臨神話の系統に関しての研究は文学界や歴史学界において多角的に為されているが、本稿は、歴史的なアプローチによって史実の真相を説き明かそうとしたものでもなければ、神話の類型に着目し、歴史的な視点から影響関係を探ろうとしたものでもない。筆者が焦点を合わせて追究したいものは、話の型、つまり内容における話型の類似性について用例を取り上げ、その奥底に流れる意味を突き止めることである。もちろん今後の課題として類型の源泉となったものを研究の視野に入れる必要はあろう。しかしここでは一貫して単なる話型の類似について検討していくことにする。

### 3. 柳花の幽閉と、朱蒙の流離

さて、籠もりする女と親元を離れる男の様子を描く話は古朝鮮の建国神話にだけではなく、高句麗の始祖である朱蒙の誕生と高句麗の建国に関わる記事のなかからも確認することができる。

#### ○ 柳花の幽閉と男児の誕生

解夫妻薨、金蛙嗣位、於是時、得女子於太白山南優渤水、問之曰、我是河伯之女、名柳花、与諸弟出游、時有一男子、自言天帝子解慕漱、誘我於熊心山下、鴨渌邊室中私之、即往不返、父母責我無媒而從人、遂謫居優渤水、金蛙異之、幽閉於室中、為日所炤、引身避之、日影又遂而炤之、因而有孕、生一卵、大如

5) 上山春平氏は、ニニギとオオクニヌシの二柱が先代に神たちと比べいろいろな面において対の形で現れないのに、対の意味をもつとすれば、それは、ニニギが天孫降臨の主役であり、オオクニヌシが国作りの主役であるという点であろうと言う。『神々の大系-深層文化の試掘』中公新書291、中央公論社、1972、pp.12~13

6) 金錫亨著・朝鮮史研究会訳(1981版)『古代朝日関係史-大和政権任那-』勁草書房、p.126。pp.132~138。尾注2(p.138)を参照した。

7) 金和経『日本の神話』第3章「出雲系神話」文学と知性社、2002、pp.142~175

五升許、王棄之与犬豕、皆不食、又棄之路中、牛馬避之、後棄之野、鳥覆翼之、王欲剖之、不能破、遂還其母、以物裹之、置於暖處、有一男兒、破殼而出、<sup>5)</sup>

これは、東明聖王の朱蒙が生まれるまでの記事を『三国史記』のなかから引用したものである。解夫妻について東扶余の王位を継承した金蛙は、いまの白頭山の南のウバルス(優渤水)という所で、自らを河伯の娘と名乗る女性の柳花に出逢い、彼女を連れてきて部屋の中に閉じ込める。ところが、日光が押し入れられている彼女の腹部をしつこく差すことによって子を孕むようになり、やがて五升ぐらいの大きさの卵を生む。そして紆余曲折を経たのち男の子が卵の皮を割って出てくるが、これが高句麗の始祖である東明聖王の朱蒙である。上の内容のなかには筆者がキーワードにしている「幽閉(籠もりの形)」の他にも、天帝子・河伯・日影・卵など、貴重な神話的要素がふんだんに刻み込まれていることがわかる。

長寿王が建てた広開土王碑文にも同じような内容が確認されるが、そこでは朱蒙が「鄒牟」となっており、また、『三国史記』で天帝の子で朱蒙の実父とされる解慕漱の名は見られず、解夫妻・金蛙・柳花など、人物の名は記されていないなど、若干の違いは見られるが概ね大同小異である<sup>6)</sup>。他、上田正昭や鳥越憲三郎氏などのように、高句麗の神話には狩猟民族のモンゴル系の北方的神話とともに南方神話に見られる卵生神話の要素が窺われる<sup>7)</sup>と言っているものも多々あるが、神話の系統に関わる論証となるためここでは割愛する。

話を戻すと、東扶余の王の金蛙によって室の中に幽閉された柳花は高句麗を建国する朱蒙を身籠り、遂に産むようになる。すなわち、女性が隔離された空間に籠もる行為の深層には新しい命の誕生や再生の意味が反映されているのである。しかも、女が身籠る過程を見てみると、人間との交わりによるものではなく、自らを「天帝子解慕漱」と名乗る男との肉体関係や、日光が体を差したということから聖婚によるものであることを示している。また卵から生れてくることから普通の人間ではないことを主張するためのものである。つまり、天を象徴する解慕漱が河を象徴する河伯の娘の柳花を娶り、神聖性に満たされた貴人が地上に生れてくるのである。結局、権力の正統性を天に置こうとする意図が垣間見られるのである。

天孫が水神の娘との聖婚の末子供を産むという構造は、日本の神代の神話において天孫のニニギの命の子でホテリの命の弟であるホヲリの命が海の神の娘のトヨタマ姫を娶り、

5) 『原文三国史記』「高句麗本紀」第一(始祖東明聖王)、李丙燾訳注、乙酉文化社、1977、p.129

6) 1面1行：惟昔始祖鄒牟王之創基也、出自北夫餘天帝之子、母河伯女郎、剖卵絳世、生而有聖德、□□□□命駕

7) 上田正昭(1970)『日本神話』岩波書店、岩波新書D88、pp.190～191。鳥越憲三郎(1992)『古代朝鮮と倭族-神話解説と現地踏査』中央公論社、中公新書1085、pp.18～28

息子を産む話と類似している。ホワリの命は彼女の助力を得て地上に帰って来、意地悪の兄のホテリの命を懲らしめて支配者になる<sup>8)</sup>のだが、ホワリの命の流離とトヨタマ姫との間で生れるウガヤフキアエズの出産に関わることについては機会を改めて論じることし本稿では省略する。

ところで、朱蒙が生れるまでの過程に見える、室の中に「幽閉」される柳花の話の傍らには、金蛙の長子の帶素らによって流離う朱蒙の話が用意されている。

○ 朱蒙の流離と高句麗の建国

金蛙有七子、常与朱蒙遊戲、其伎能皆不及朱蒙、其長子帶素、言於王曰、朱蒙非人所生、其為人也勇、若有後患、請除之、(中略)王子及諸臣、又謀殺之、朱蒙母陰知之、告曰、国人将害汝、以汝才略、何往而不可、与其遲留而受辱、不若遠適以有為、朱蒙乃与鳥(烏)伊・摩離・陝父等三人為友、行至淹遶水一名蓋斯水、在今鴨綠東北、欲渡無梁、(中略)朱蒙行至毛屯谷魏書云至、音述水、遇三人、其一人着麻衣、一人着衲衣、一人着水藻衣、朱蒙問曰、予等何許人也、何姓何名乎、麻衣者曰、名再思、衲衣者曰、名武骨、水藻衣者曰、名默居、而不言姓、朱蒙賜再思姓克氏、武骨仲室氏、默居少室氏、乃告於衆曰、我方承景命、欲啓元基、而適遇此三賢、豈非天賜乎、遂揆其能、各任以事、与之俱至卒本川魏書云至川紇升骨城、觀其土壤肥美、山河險固、遂欲都焉、而未違作宮室、但結廬於沸流水上居之、国号高句麗、<sup>9)</sup>

弓の名手に成長した朱蒙は、金蛙王の七人の息子と臣下たちの謀殺の計らいに危険を感じた柳花夫人の戒めを受け入れ、ついに東扶余を立ち流離する身となる。朱蒙は烏伊・摩離・陝父三人を友として逃亡するが、途中の淹遶水と毛屯谷を通りながら、再思と武骨、そして默居の三人に遇って勢力が強大になり、卒本川に到って弗流水辺に建物を造って国を建て高句麗と称するようになる。

前述のように、桓雄が桓因の庶子で親元を離れたのと同じく、朱蒙も金蛙王の七人の息子たちと共に遊戯したとあり、長子の帶素をはじめ王子と臣下たちから迫害を受け、追い出されるような形で母から離れてさすらうのである。そして逆境を乗り越えて高句麗を建国する。ところで逃亡の際、追手の追撃から上手く逃れることができたのは、人間の助力の他にも河の魚と鼈が橋を成して渡すような助けがあったからである<sup>10)</sup>。広開土王碑文には親元を離れる理由などについての言及はなく、橋を成してくれたのも鼈と魚ではなく、亀と葦でなっている橋が現れたとあるが、ここは河伯の外孫として助けを受ける朱蒙の神聖さが裏付けら

8) 『古事記』上巻、荻原浅男校注・訳、小学館「日本古典文学全集」、1994、pp.136～143

9) 2p.130

10) 恐為追兵所迫、告水曰、我是天帝子、河伯外孫、今日逃走、追者垂及如何、於是、魚鼈浮出成橋、朱蒙得渡、魚鼈乃解、追騎不得渡、云々、2p.130

れる所である。そして最期の表現として黄竜が天から王を迎えにきたとする<sup>11)</sup>。すなわち、父系の本拠の天上へと帰っていくのである。

さて、庶子としての男が親元を離れ逃亡するなど相通ずる話が『古事記』にも確認される。スサノヲの六代孫のオオクニヌシは兄たちの八十神の迫害に遭い逃亡するが、それにともなう兄たちの追撃の様子が見られ、追手から逃れ、紀伊国から根の国に到るまでの過程が生き生きと描き出されている。さらに、因幡国のヤガミ姫を娶るために兄弟の八十神に同行していく途中、皮を剥がれて苦しむ白兔に出会う場面があるが、兔が鰐(鮫)を騙し、背中を踏んで淤岐の島から因幡国へ渡る話である。つまり、動物の登場が見られるところ<sup>12)</sup>なども類型と言えれば類型の素材といえよう。

#### 4. 籠もるイザナミとアマテラス

今までの内容から確認できるように、朱蒙の母親の柳花は金蛙王によって明確な理由もなく、家の中に閉じ込められ、懐妊し、卵を生む。そして、高句麗の始祖となる朱蒙が生まれてくるのだが、すなわち、柳花が家の中に押し入れられる構造は、事実上、生産のための一種の籠もりの行為だったと解釈できるのである。壇君神話に、熊が外の世界と隔離された洞窟の中に籠もり、蓬と蒜を食べながら忍耐の日々を送ったあげく、ついに女性に生まれ変わり、壇君を出産する展開と類型の構造ということができよう。籠もりや幽閉の様子を描いている話は、表面上では苦渋と試練を装っているが、その内側には女性が生まれながらに持っている懐妊と出産の属性が反映されており、またそこには、生産や再生を念願する信仰が内在されているのである。

ところで、このように女主人公が洞窟に籠もったり隔離された空間に押し入れられたりする話型は、日本の神話や物語文学のなかからも容易に見出すことができる。神話における代表的な例として、イザナミの黄泉の国での話と、アマテラスの天石屋戸話を挙げることができる。まず、イザナミの黄泉の国の訪問に見られるイザナミの様子から見てみたい。

##### ○ 黄泉の殿に入るイザナミ

於是欲相見其妹伊耶那美命、追往黄泉国。爾自殿隙戸出向之時、伊耶那岐命詔之、愛我那迩妹命、吾与汝所作之國未作竟。故可還。爾伊那美命答曰、悔哉、不速來。吾者為黄泉戸喫。然愛我那勢命〔那勢二字以音。下効此〕入來坐之事

11) 1面2行：巡幸南下，路由夫餘奄利大水，王臨津言曰「我是皇天之子，母河伯女郎，鄒牟王，爲我連葭浮龜」應聲即爲(我連葭浮龜；3行)1面3行：連葭浮龜，然後造渡，于沸流谷忽本西，城山上而建都焉。不樂世位，因遣黃龍來不迎王。王于忽本東，黃(龍負升天；4行)

12) 7)pp.92~94



恐。故欲還、且与黄泉神相論。莫視我。如此白而還入其殿内之間、甚久難待。故刺左之御美豆良〔三字以音。下効此〕湯津津間櫛之男柱一箇取闕而、燭一火入見之時、宇土多加礼許呂々岐豆〔此十字以音〕、於頭者大雷居、於胸者火雷居、於腹者黒雷居、於陰者析雷居、於左手者若雷居、於右手者土雷居、於左足者鳴雷居、於右足者伏雷居、并八雷神成居。13)

本文に記されているように、火の神のホノカグツチを産んだのが原因で女性器を焼かれ病み臥せ、結局死んで黄泉の国に行ってしまったイザナミを現世に戻すために、夫のイザナキは黄泉へ訪問するのだが、イザナミはもう黄泉の国の食物を食べてしまい、帰れない身になったと言う。しかし、殿の内に入って黄泉の神と相談するから、その間、絶対中を覗いてはならないと戒める。しかし結局、イザナキが警告を破り殿の中へと入ったのが原因で、イザナミの憤怒を買い、黄泉の国から逃走する境遇に立たされるのである。

すなわち、女神のイザナミが殿の内に入った理由は蘇生のためであったのだが、イザナキが戒めを破り、現世へと連れ戻そうとした計画は水泡に帰するのである。日本語には「蘇る」という動詞があるが、これは元々「黄泉から帰る」ということから由来した言葉なのである。つまり、女神のイザナミが入った黄泉の殿の中は再生が行われる空間で、男の立ち入りはもちろん、覗き見ることさえ忌まれる所謂「見るなの座敷<sup>14)</sup>」である。そこには女性の籠もりとそれによる再生儀式の投影を窺うことができるのである。

また、もう一つの例としてアマテラスの天石屋籠もりを抜かすことはできない。アマテラスは天皇の祖先として崇拝される神で、高天原の主宰神でもあり、女性性を有する。ところで、アマテラスは高天原を訪問した弟のスサノヲの度重なる乱行に耐えかね、以下の引用文に記されているように、天石屋に籠もってしまう。そして高天原と地上は暗黒に変わり、あらゆる災いが起こる。

○ 天石屋に籠もりに入る天照大御神

故於、是天照大御神見畏、開天石屋戸而刺許母理〔此三字以音〕、坐也。爾高天原皆暗、葦原中国悉闇。因此而常夜往。於是万神之声者狭蠅那須〔此二字以音〕滿、万妖悉發。是以八百万神於天安河原神集々而〔訓集云都度比此〕、高御産巢日神之子、思金令思〔訓金云加尼〕而、集常世長鳴鳥令鳴而、取天安河之河上之天堅石、取天金山之鉄而、求鍛人天津麻羅而〔麻羅二字以音〕、科伊斯許理度壳命〔自伊下六字以音〕令作鏡、科玉祖命令作八尺勾璁之五百津之御須麻流之珠而、召天兒屋命・布刀玉命〔布刀二字以音。下効此〕而、内拔天香山之真男鹿之肩拔而、取天香山之天之波々迦〔此三字以音。本名〕而、令占合

13) 7)pp.66~67

14) 河合隼雄(1982)『昔話と日本人の心』の第1章に日本の昔話における「見るなの座敷」の用例が詳細に言及されている。岩波書店、pp.4~5

麻迦那波而〔自麻下四字以音〕、天香山之五百津真賢木乎根許士爾許士而〔自許下五字以音〕、於上枝取著八尺勾璫之五百津之御須麻流之玉、於中枝取繫八尺鏡〔訓八尺云八阿多〕、於下枝取垂白丹寸手・青丹寸手而〔訓垂云志殿〕、此種々物者、布刀玉命布刀御幣登取持而、天兒屋命布刀詔戸言禱白而、天手力男神隱立戸掖而、天宇受売命手次繫天香山之天之日影而、為縵天之真析而、手草結天香山之小竹葉而〔訓小竹云佐々〕、於天之石屋戸伏汗氣〔此二字以音〕而踏登杼呂許志〔此五字以音〕、為神懸而、掛出胸乳裳緒忍垂於番登也。爾高天原動く而八百万神共咲。

於是天照大御神以為怪、細開天石屋戸而內告、因吾隱坐而以為天原自闇、亦葦原中国皆闇矣、何由以天宇受売者為樂、亦八百万神咲。爾天宇受売白言、益汝命而貴神坐故、歡喜咲樂。如此言之間、天兒屋命・布刀玉命指出其鏡、示奉天照大御神之時、天照大御神逾思奇而、稍自戸出而臨坐之時、其所隱立之天手力男神取其御手引出。即布刀玉命以尻久米〔此二字以音〕繩控度其御後方白言、從此以內不得還入。故天照大御神出坐之時、高天原及葦原中国自得照明。<sup>15)</sup>

やや長いが、アマテラスが天石屋戸の中に籠もる時点から引き出されるまでの過程を描写した個所の全文を引用した。八百万神がアマテラスを天石屋から外へと呼び出すために謀議し、アメノウズメが胸をさらけ出したまま、袴の紐を女陰の上に垂らして神がかりの踊りを踊る。また、その光景を見ていた全ての神が哄笑する。石屋の外の様子に疑問を感じたアマテラスが石屋戸を少し開けその訳を聞くと、一人の神が鏡を照らし、また手力男が外へと引っ張り出して、石屋戸の前に注連縄を張る。それから世は再び明るさを取り戻し、乱行を繰り返して事態を招いたスサノヲは地上へと追放される。

いうまでもなく、この神話においても再生する女神の特徴が克明に現れている。太陽の神と称される女神のアマテラスが天石屋に籠もるのは冬至の儀式を表し、日本では晦といって、一年の内、太陽の力が最も弱い12月の末に、衰え弱り果てた太陽を洞窟の中に籠もらせ、正月に新しい太陽として復活させるのである。そのため日本では太陽の神が再生を象徴する女性性を有するのである。女の籠もる行為については前掲<sup>1)</sup>の拙論を参照されたい。

## 5. 流離うスサノヲとオオナムチ

一方、イザナミが入った見てはならない空間を見てしまったイザナキは黄泉の国から黄泉比良坂へ向って高跳びし、イザナミの遣った追手と最終的に直接追ってきたイザナミを振り

15) 7) pp.83~85

切って逃亡に成功する。また、アマテラスの籠もりが終わるとスサノヲは地上へと追放され、流離いの神となる。また、八十神に追われて根の国へ行くオオクニヌシについてはもう言ったところである。このように、韓国と日本の代表的な神話を通じて再生と関わる女主人公の籠もりとともに、流離漂白する男主人公に出会うことができる。

しかし、一つ興味深いのは、両親の下を離れて流離する者は嫡長子でない場合が多く、また、流離いを通じて試練に耐えながら次第に強大な力を蓄えていくところである。朱蒙は周知のように、柳花が金蛙に出会う前に身籠って産んだ子であり、金蛙王の長子である帯素をはじめ、七人の息子と臣下たちに追われ、逃走する境遇に立たされる。朱蒙は峻しい山河を通り過ぎるうちに、様々な逆境を乗り越え同志を糾合して強盛な勢力をつくりあげ、ついに国を建てて高句麗と称するようになる。また、桓雄の場合も桓因の庶子として生まれ、人間の世を欲しがり、結局、父の許しを得て離天し地上に降りてきたと記している。すなわち、嫡子や長子がいる以上、支配権を譲られることは不可能で、彼らに追われたり自ら王権を握るために本土を離れる身の上になるのである。

百済の場合は建国に纏る神話的要素は見当たらないが、『三国史記』の百済本記には朱蒙が北扶余から逃亡してきて卒本扶余の王の次女と結婚して、王位を継ぎ、そこで生まれたのが沸流と温祚となっている。だが、北扶余にいるとき関係を結んで生れた嫡子の琉璃が来て太子になったため卒本を逃れ、南行して住むところを求めたとある。つまり、ここにも庶子の流離の様子が刻み込まれているのである。

○ 高句麗を離れ、南下する温祚

①百済始祖温祚王、其父鄒牟、或云朱蒙、自北扶余逃難、至卒本扶余、扶余王無子、只有三女子、見朱蒙、知非常人、以第二女妻之、未幾扶余王薨、朱蒙嗣位、生二子、長曰沸流、次曰温祚或云、朱蒙到卒本娶越郡女、生二子、及朱蒙在北扶余所生子来為太子、沸流・温祚、恐為太子所不容、遂与烏干・馬黎等十臣南行、(後略)

②一云、始祖沸流王、其父優台、北扶余王解夫婁庶孫、母召西奴、卒本人延陶勃之女、始歸于優台、生子二人、長曰沸流、次曰温祚、優台死、寡居于卒本、後朱蒙不容於扶余、以前漢建昭二年春二月扶余所生礼氏子孺留来、立之為太子、以至嗣位焉、於是沸流謂弟温祚曰、始大王避扶余之難、逃歸至此、我母氏傾家財助成邦業、其勤劳多矣、及大王厭世、国家屬於孺留、吾等徒在此、鬱鬱如疣贅、不如奉母氏南遊卜地、別立国都、<sup>16)</sup>

朱蒙の長子で嫡子の琉璃が太子になると彼に受け入れてもらえないだろうと思い、高句麗を離れ南下していくのである。庶子の流離漂白と新しい国家建設という側面から考えると類似した話型として理解される。②の一説は、百済を建国する温祚と兄の沸流は朱蒙の息

16) 『原文三国史記』卷二十三、「百済本紀」第一(始祖温祚王)、李丙燾訳注、乙酉文化社、1993、pp.207~208

子ではなく、解夫妻の庶孫の優台を父とし、母は召西奴としている。しかし優台が死に、寡婦になった召西奴は以後朱蒙が高句麗を建国する時の多大な貢献が認められ夫人になり、寵愛を一身に集めていたのである。また、沸流と温祚の兄弟も朱蒙に実子のような扱いをされていた。テレビドラマでは、この説を取り入れてストーリーを展開させているわけだが、単純な粗筋よりは、変化に富み、ドラマチックな素材が多い説を採用していることがわかる。いずれにせよ、温祚と沸流が国都を離れて南下する様子からは国家経営の権限を嫡子に譲った庶子としての鬱憤が窺われ、また、このような史実が本国を離れ流離う男の神話を醸し出しているのであろう。

さて、以上のような話型は日本の神話の中からも容易に見出すことができるが、やはり多くの男主人公が父母や兄弟によって追い出され、放浪する境遇に置かれる。日本ではこれを貴種流離譚と称するが、日本の神話に登場する殆どの男主人公の運命はこの話型に当てはまるといっても過言ではない。以下でいくつか代表的な用例を取り上げて論じることとする。まず、スサノヲについてである。

○ 追放されるスサノヲと宮の造営

①故伊耶那岐大御神詔速須佐之男命、何由以汝不治所事依之国而、哭伊佐知流。爾答曰、僕者欲罷妣国根之堅州国故哭。爾伊耶那岐大御神大忿怒詔、然者汝不可住此国。乃神夜良比爾夜良比賜也〔自夜以下七字以音〕。17)

②於是八百万神共議而、於速須佐之男命負千位置戸、亦切鬚及手足爪令拔而、神夜良比夜良比岐。18)

③故所避追而、降出雲国之肥河上、名鳥髮地。19)

④故是以其速須佐之男命、宮可造作之地求出雲国。爾到坐須賀〔此二字以音。下効此〕地而詔之、吾来此地、我御心須々賀々斯而、其地作宮坐。20)

引用文で見ると、高天原の主宰神のアマテラスの弟のスサノヲの場合、もともとイザナミとともに日本の国土とその上のあらゆる事物を生んだ男神のイザナギが鼻を洗うときに生まれた神で、父親の命令に従わなかったことが原因で追放されるようになる。しかし、追放の前に高天原を統治する姉のアマテラスに別れを告げるといって昇天し、そこで次々と乱行をはたらき、再び地上へと追放される身となる。しかし、地上に降りてきてからスサノヲが英雄の神に生まれ変わっていることを窺い知ることができる。出雲の肥河の上流に神やらいされたスサノヲは、そこで処女を生け贄にするヤマタノオロチ(八俣大蛇)を退治して、自らを国神の子と称する翁夫婦の娘のクシナダ姫(櫛名田比売)を妻にして宮殿を造営する。

17) 父神のイザナギによって神やらいされるスサノヲの話で、スサノヲの一回目の追放である。7)p.74

18) 高天原で八百万の神によって神やらいされるスサノヲの話で、スサノヲの二回目の追放である。7)p.85

19) 高天原で神やらい先は出雲で、スサノヲが支配する国となる暗示性が示されている。7)p.87

20) 出雲でヤマタの大蛇を退治したスサノヲはクシナダ姫を妻にして宮を造り、統治者となる。7)p.91

神話を見てわかるようにスサノヲはイザナキの子ではあるが、嫡統を継承する者とは思えない。また、高天原の世界から地上へ追放される立場ではあるが、一種の降臨と見做すことができ、さらに、ヤマタの大蛇を退治してクシナダ姫を妻に迎え須賀の地に宮殿を造営するとき詠んだ「八雲立つ」の歌には、女性の籠もる行為を思わせるものがある<sup>21)</sup>。すなわち、スサノヲの話には出雲の支配者となった男の追放と征服を物語るものと共に女の籠もりの特性が見受けられるのである。「妻籠み」の語を含む歌には新しい命の身籠り、つまり生産を暗示させるものが読み込まれているのである。

『古事記』の神代神話における男の流離い譚のもう一つの例として、スサノヲの六代目の孫に当たるオオクニヌシ(最初の名は、オオナムチ)の話が挙げられる。内容を概観すると、兄弟の八十神は因幡国に美しいヤガミ姫が住んでいるということを知りつけ、求婚するために旅に出るが、全ての荷物を異腹の弟のオオナムチに背負わせる。因幡に辿り着き女の人を探し出すが、彼女はオオクニヌシを自分の夫として選び、それが原因で兄弟の八十神の嫉妬を買い酷な迫害が始まり、逃亡に到るのである。

○ 大穴牟遲の避難

①於是八上比売答八十神言、吾者不聞汝等之言。將嫁大穴牟遲神。故爾八十神忿、欲殺大穴牟遲神共議而、云々。<sup>22)</sup>

②於是八十神見且欺率入山而、切伏大樹、茹矢打立其木、令入其中即、打離其氷目矢而拷殺也。爾亦其御祖哭乍求者、得見即、拆其木而取出活、告其子言、汝者有此問者、遂為八十神所滅。乃違遣於木国之大屋毘古神之御所。爾八十神覓追臻而、矢刺乞時、自木俣漏逃而云、可參向須佐能男命所坐之根堅州国。必其大神議也。故隨詔命而參到須佐之男命之御所者、云々。<sup>23)</sup>

オオナムチは兄神たちの数回にわたる計略に嵌まり、死ぬ危機に直面するのだが、母親の献身的な愛に命を助けられ、また母親の勧誘で出雲を離れて紀伊国を経てスサノヲが住む根の堅州国に向かい流離いの旅に出るのである。そしてオオナムチは根の国でスサノヲから出された困難な課題をスサノヲの娘のスセリビメの助力でやり抜け、強力な力を身につけて出雲に帰ってくるのである。スサノヲが寝ている隙にスセリビメを背負い、そして、生大刀と生弓矢・天の沼琴を盗んで戻ってくる。つまり、支配者の象徴たるものを手に入れたことを暗示させている<sup>24)</sup>。これをもって兄弟の八十神を屈服させ支配者となり、オオクニヌシになる

21) 「八雲立つ 出雲八重垣 妻籠みに 八重垣作る その八重垣を」のなかでの「籠み」はこむの連用形で、包み隠す、または、こもらす意味を持つ言葉である。7)p.90

22) 7)p.96

23) 八十神による迫害と、根の国への逃亡譚である。7)pp.99~100

24) オオクニヌシが盗んだ生大刀と生弓矢は武力、すなわち、政治的支配力を示すものであり、天の沼琴は宗教的権威を象徴するものである。全集本頭注参照。7)p.98

のである。「鑑賞」は、オオナムチの迫害による受難と根の国における試練の話には、基本的に成年式の習俗の投影があると述べる<sup>25)</sup>が、しかし、それだけではなく、試練話にはオオクニヌシが権座を獲得し支配に至る行為の正統性を持たせるための装置が施されているのである。男が必然的に兄弟の迫害を受け親の居る本拠を離れ、苦渋の旅に出ることが想定されているということである。

ことに、このオオクニヌシの話には前述したように朱蒙の話と相当の類似点が見られ、その関連性についての綿密な考察が要求されるといえよう。なお、イザナキの逃亡譚やホヲリの命が兄のホデリの命に苛められ、海辺を流離い海神の宮を訪問した後、力を蓄え地上に戻ってきて支配者になる話も類型を示しているが、これらの流離譚の深層については後日改めて論じることにする。

## 6. おわりに

いままで述べてきたように、韓国と日本の主要神話のなかには親元を離れて流離う男の主人公と、自らまたは他意によって閉鎖された空間に閉じ籠ったり押し入れられたりして苦渋を余儀なくされる女主人公の話とが容易に見受けられる。ところが、表面的には試練の様子を描いているが、実際、女性の籠もりは出産や再生を祈願する信仰の反映であり、親元を離れた男性の流離漂白の姿は、権力から疎外された王子が、自分の意思または他人の迫害などによって本土を離れ、逆境を強いられる構造を帯びているが、そこには新しい王国建設のための通過儀礼のような意味が暗示される場合が多いということができよう。

本論で述べたが、桓雄による天孫降臨の形態を、離天、すなわち親元を離れた貴種の物語と取れなくもないと考える。つまり、桓因の庶子であった桓雄の降臨は、結局後継者になれない男の天からの離郷と見るのである。もちろん、それが天孫降臨型の神話であることに変わりはない。

そして、温祚と沸流が国都を離れて南下する様子からは国家経営の権限を嫡子に譲った庶子としての鬱憤が窺われ、また、このような史実が本国を離れ流離う男の神話を醸し出しているのであろう。

25) 上田正昭・井手至編「鑑賞日本古典文学」『古事記』角川書店、1978、pp.140～141

## 【参考文献】

- ・ 李丙燾訳註(1992)『訳註原文三国遺事修正版』巻一、紀異巻第一、明文堂、p.27
- ・ 李丙燾訳註(1977)『原文三国史記』 「高句麗本紀」第一(始祖東明聖王)、「百濟本紀」第一(始祖温祚王)、乙酉文化社、pp.129~130・207~208
- ・ 荻原浅男校注・訳(1973)『古事記』上巻、小学館「日本古典文学全集」、pp.66~67・74・83~85・87・91・96・99~100
- ・ 西郷信綱・永積安明・広末保(1966)『日本文学の古典』岩波新書E22、岩波書店、p.7
- ・ 上田正昭(1970)『日本神話』岩波書店、岩波新書D88、pp.190~191。
- ・ 上山春平(1972)『神々の大系-深層文化の試掘』中央公論社、中公新書291、pp.10~29
- ・ 上田正昭・井手至編(1978)「鑑賞日本古典文学」『古事記』角川書店、pp.140~141
- ・ 金錫亨著・朝鮮史研究会訳(1981版)『古代朝日関係史-大和政権任那-』勁草書房、p.126・pp.132~138
- ・ 河合隼雄(1982)『昔話と日本人の心』第1章「見るなの座敷」、岩波書店、pp.4~5
- ・ 鳥越憲三郎(1992)『古代朝鮮と倭族-神話解読と現地踏査』中央公論社、中公新書1085、pp.18~28
- ・ 金和経(2002)『日本の神話』第3章「出雲系神話」文学と知性社、西南東洋学術叢書19、pp.142~175
- ・ 権五曄(2006)「『三国史記』の朴赫居世神話-新羅の世界観と于山国-」『日本文化学報』31輯、韓国日本文化学会、pp.425~450
- ・ 関丙勲(2007)「古代文学における女の『籠もり』-話型としての女の試練譚-」『日本語文学』34輯、韓国日本語文学会、pp.207~228

## 要 旨

平安時代の物語に現れた典型的な話型としての男の貴種流離や女の籠もり譚は、時代を遡って『古事記』の神話のなかからも容易に見出すことができる。つまり、物語の原形を神話から探ることができるということである。

ところで、日本の神話における流離や籠もり譚は、相違点がないわけではないが、韓国の建国神話のなかからも数例確認される。『三国遺事』において、天帝釈の桓因の庶子である桓雄が離天し、地上に降りてきたり、洞穴の中に籠もることで女に生まれ変わる熊女の話や、『三国史記』の「高句麗本紀」のなかで、扶余王の金蛙に連れてこられ、室の中に幽閉される柳花の話と、嫡長子の帶素などに迫害を受け東扶余を逃れる朱蒙の話などは、類型といえは類型といえる。もちろん、桓雄の離天には天孫降臨の性格が何より強いのも事実である。だが、本論で言ったように、筆者は、桓雄による天孫降臨の形態を離天、つまり文学的発想として、親元を離れた貴種の物語とも取れると考える。天帝釈の座を継げなかった庶子の離天の話として理解されるのである。とはいえ、それが天孫降臨型の神話であることに変わりはない。

さて、以上の話型の結果として、おおよそ男は流離から力を蓄えて帰ってきて迫害した嫡子などを屈服させ支配者になったり、あるいは流離先で新しい国を建国したりする話が続き、女の場合は、籠もりの末、再生したり子供を産んだりする結果を齎している。

すなわち、韓国と日本の主要神話のなかには親元を離れて流離う男主人公と、自らまたは他意によって閉鎖された空間に閉じ籠ったり押し入れられたりして苦渋を余儀なくされる女主人公の話とが容易に見受けられる。ところが、これらの話は表面的には試練の様子を描いているが、実際、女性の籠もりは出産や再生を祈願する信仰の反映であり、親元を離れた男性の流離漂泊の姿は、権力から疎外された庶子や次子以下の王子などが、自分の意思または他人の迫害などによって本土を離れ、逆境を強いられる構造を帯びているが、そこには新しい王国建設のための通過儀礼のような意味が暗示される場合が多いといえることができる。

キーワード：離天、流離、幽閉、籠もり、桓雄、熊女、朱蒙、柳花

투 고 : 2008. 2. 29  
1차 심사 : 2008. 3. 15  
2차 심사 : 2008. 3. 29

住 所 : (300-716) 대전광역시 동구 용운동 96-3 대전대학교 일어일문학과  
電 話 : 042-280-2259  
e-mail : mbh0301@dju.ac.kr